

<特別編> 子育てには、エネルギーがめっちゃくちゃ必要



私が医学部4年生だった頃の話です。

夫は、昼間は高校の理科の先生、夜は夜間の経済学部の大学生と忙しく、子育ては主として私がすると決めていました。

子供は2歳半と1歳のヤンチャ盛りの男の子ふたりです。

朝、子供たちにご飯を食べさせて、7時半ごろに夫と一緒に子供たちを自転車に乗せて、通勤・通学の最寄駅の途中にある保育園に向かいます。

その後、最寄駅から、私は大学、夫は高校へと別行動です。

大学での講義や実習時間は、私の唯一の休み時間でした。

大学が終わると、ダッシュで保育園に子供を迎えに行きます。

ピックアップ後は、前と後ろの補助席に子供達を乗せて、自転車で夕飯の買い物です。

その間、子供はその日の保育園での出来事を喋りっぱなしです。

その頃は、自転車を漕ぎながら、子供の言い分を聞いて、それに余裕を持って答えていました。

ついでに、馴染みのお肉屋さんでコロッケを2つ買って、子供達に1つずつわたしておしゃべりを封じます。

当時のヤワな自転車に3人乗り、

ということで警官に呼び止められたことも二度三度ありました。

でも、状況を察してくれたのかいつも放免されました。

というか、呆れられました。



家に帰ったら、直ぐに夕飯作り。手抜きを超時短料理はお手のものです！さあ、できた。

食事中も子供の世話で手一杯です。子供と一緒にいる時は私の食事はいつも立ったままです。

その頃、切に思ったのは、「子供たちがこぼすご飯を食べてくれる鶏が欲しい」でした。

もっとも、住んでいるのが街中の住宅街なので、その思いは無理なのはよーく分かっていました。

しかし、もし、「一つ願いを叶えてやろう！」と言われたら、

「世話のいらぬ鳴かない鶏」と即答していたでしょう（なんと、超近視眼）。

食後は子供たちを風呂に入れて、絵本を読んで、寝かしつけて子育ては一旦終わりです。
その頃に、夫は帰宅します。
私は、残りの家事やら、大学の宿題やらで、アタフタ・ワラワラと作業を続けます。
就寝はたいい午前様でした。



こんな子育て生活を送っていた頃、
公衆衛生学か衛生学で栄養学の講義があり、宿題が出ました。
1日に摂取するエネルギーと消費するエネルギー量を計算して、
週日1週間分を提出するというものでした。
私も1日あたりのエネルギー消費量を計算したところ、
ほぼ毎日、3,500~4,000 Kcal越えでした。
自分でも、消費量の多さにびっくりしたのを覚えています。
ちなみに、同級生は、2,000~2,500 Kcalでした。
私が提出した宿題を見た若い、多分独身の先生の驚いた顔は、見ものでした。
間髪を入れず、なんでエネルギー消費量がべらぼうに高いのか、いろいろ質問されました。
答えを聞いた先生は納得顔で教室を去って行きました。

医師で子育て中の研究者は、
私が大学で休憩していた時間も、気の休められない診療に従事しています。
その奮闘ぶりは想像するに難くありません。

それでも、どうか、どうか、研究の道を諦めないでください。
臨床医学の問題点に気づき、その解決法をひらめくことができるのは、
現場の医師だけですから。

※ この特別編は、ダイバーシティ推進室にて実施している「研究支援員配置制度」拡大のためのクラウドファンディングへの
応援メッセージとしてご寄稿いただきました。プロジェクトページの活動報告にも掲載しています。

https://readyfor.jp/projects/hyomed_nanairo/announcements